

第III章 総括

高浜中原遺跡では、旧石器時代、縄文時代早期の文化層を確認することができた。ここではそれらの要点をまとめ総括としたい。

旧石器時代 本遺跡の主な旧石器時代の遺構、遺物としては、礫群3基、10点の剥片尖頭器、42点の剥片、石核が接合した接合資料が挙げられる。礫群は広範に広がる礫群1と掘り込みをもち小型であるが礫が密集する礫群2、3に分けられる。この礫群2に近接する位置で剥片尖頭器が未成品も含め10点出土した。その範囲は径4mほどであり、縄文時代早期遺物包含層に混入して出土した93以外は出土レベルも大きな隔たりはない。石材に着目してみると、ホルンフェルス製の剥片尖頭器が5点と最も多いため、ホルンフェルスの石核は本遺跡では出土しておらず、剥片も小振りであり7～9といった大型の剥片尖頭器を作り出せるほど大型の剥片は出土していない。碎片が出土していないことも加味するとホルンフェルス製の剥片尖頭器は製品として遺跡外から持ち込まれたと考えられる。砂岩（2点）、頁岩（1点）に関しては、素材剥片は出土しているものの、碎片が出土していないことから製品+素材剥片を本遺跡に持ち込んだ可能性がある。流紋岩（1点）に関しては接合資料が出土しているものの、剥片尖頭器と接合はせず、出土位置、出土レベルも相違することから製品として持ち込まれたと想定される。本資料は欠損資料であるが、側縁先端付近に調整がみられ転用品の可能性がある。接合資料は42点が接合した接合資料④が注目される。接合するとほぼ母岩に近い形状となり、素材剥片として持ち出した点数は少ないとと思われる。また、作出する剥片は縦長剥片を基本とするものの、一部横長剥片を作出していることから、一母岩から縦長、横長両剥片を作出する稀有な事例である。本遺跡出土石器は宮崎10段階編年の第6段階に位置づけられる。

縄文時代 縄文時代は草創期の土器が1点出土しているものの、早期前葉、前平式土器を中心とする。出土した土器は全体数でも少数であり、本遺跡は継続的に利用された場所ではないようである。石器は特徴的な組成を示す。石鏃など狩猟具の出土が非常に少数であり、磨製石斧の出土が顕著である。遺構として注目されるのは炉穴である。大淀川流域の内陸丘陵部への入口付近に当たる旧高岡町域では、多くの縄文時代早期の遺跡が調査されているが、本遺跡の調査までは炉穴は確認されていなかった。分布域に若干の変更が生じることになる。

本遺跡の調査で最も大きな成果といえるのが、当遺跡が所在する段丘上で旧石器時代の遺構、遺物が確認されたことである。今回の調査以前は、谷を挟んで南側、高野原遺跡や永迫第1、第2遺跡が所在する段丘上には旧石器時代の遺跡が存在するが、その段丘よりも標高がやや低く、大淀川に近い当遺跡が所在する段丘上には旧石器時代の遺跡は存在しないと想定されてきた。今回の調査結果により、今後当遺跡が所在する段丘上では旧石器時代の遺構、遺物が検出されることを念頭に置き調査する必要がある。

註：本遺跡で出土した流紋岩は、いわゆる五ヶ瀬川流域産の流紋岩とは異なるものである。